

起こします。またある時、この恩師と生協で昼食をとっていたら長尾眞先生（元京都大学総長、当時は教授）が向かいに座られ（うどんを啜りながら）「近頃の院生は勉強せーへんな」の一言、ただただ頭を下げましたが教員と学生の距離が本当に近かったなと懐かしく思い出されます。

さて、大学教員の身分となって久しく、大学を取り巻く環境も時代と共に大きく変化しました。インターネットで情報はすぐに入手でき、計算機の速度とメモリ量も飛躍的に向上して、より良い研究環境が実現されたはずなのに「時間がない」。その結果、いつの間にか学生との「濃厚なコンタクト」が実践できない私があります。教員と学生との関係はちゃんと保っていますが、それだけの関係になりつつあります。会議も出張も多い、学生の意識も変わり就職活動とかで落ち着かない、色々と言ひ訳はありますが事実は事実です。私が良き恩師になれるかは別として、少なくとも反面教師であってもより一層の日々のコンタクトを心がけたいと思います。

同じことが学会活動でも起きてはいないでしょうか。設立当初より SITA 学会は役員と会員が一体で、

またシンポジウムでは大先生と学生の距離もない素晴らしい運営がなされてきました。しかしながら、特に若手の人材難による役員人事の硬直化が一時期あったような気がします。確かにボランティアベースで学会を運営するには難しい規模になっていることも事実ですし、そもそも見かけの損得勘定だけならボランティアで役員を務めるより業績を稼ぐことが重要と考えるのも正しいかも知れません。特に、プロモーションが気になる若い世代ほど当然の考えです。しかし、私自身は SITA の学会活動を通して多くの方と「濃厚なコンタクト」で得られたものは貴重な財産であると断言できます。インターネットと計算機が早くなっても「人から人へ」しか伝わらない情報があることの重要性を再認識しております。昨年来、SITA の有り様に関する議論が「SITA 将来検討 WG」を中心に進められております。その中でも SITA 設立当初来の良さを如何に残せるかが重視されています。「濃厚なコンタクト」で「人から人へ」伝える文化が引き継がれるよう副会長として尽力していきたいと考えます。

名誉会員の挨拶

名誉会員 小川 明 (名城大学)



名誉会員 小川 明 (名城大学)

はじめに

このたび「情報理論とその応用学会」の名誉会員に推挙され、大変光栄なことと存じております。それと共に、岩垂先生と丸林先生お二人の先輩名誉会

員が続けて逝去されるという訃報に接し、悲しみを禁じ得ません。謹んで哀悼の意を表すしだいで。

私は、シンポジウムに関わった以外、学会の運営に携わったこともなく、名誉会員に相応しい貢献をしたかという、あまり自信がありません。むしろ本学会から受けた恩恵の方がずっと大きいと思います。私自身、本学会を通じて多くの研究者の方々との知合い、さまざまな形で研究のヒントを受けたことに加えて、自研究室の学生たちに研究発表と交流の場を与えてもらったことに深く感謝しております。実際、約 20 年間の教師生活の間に自研究室にいた大学院生のほとんどが SITA あるいは ISITA で参加発表の経験をしております。このことは、本学会が、情

報理論とその応用という分野での研究交流の場を提供すると同時に、若手研究者の育成という重要な役割を果たしてきたと言えます。このような顕著な特徴を持つ本学会の名誉会員にいただいたこの機会に、大学教育と研究の関わりについて日頃心に抱いていることを述べさせて頂き、挨拶に代えたいと思います。

大学教育について

大学における工学系教育には、基本的に、講義、演習、実験、研究などがあります。講義は、最も一般的で基本的なものですが、学生にとっては受け身で終始することが多く、思うように身につかないのが実情ではないでしょうか。演習は、理解を深めるのに効果がありますが、答案の採点に手間がかかります。本来であれば、演習のたびに答案にコメントをつけて学生に返すべきですが、受講生が100人以上ともなるとそれに要する労力は大変なものになります。実験は、講義より面白いと思われがちですが、近頃はレポートを書くのが苦手という学生が多く、何度も書き直すことになると、学生も教師も疲れ果ててしまいます。研究について、社会では研究を重視すると、専門バカになると言う人がいますが、これはほとんど誤解であって、私は、研究こそが学生を育てる工学教育の真髄であると思っています。研究については、さらに詳しく次に述べることにします。

研究による教育について

大学における研究の一般的傾向として、企業における研究に比し、より基礎的、理論的であり、新規性が重視されるといえます。ただそれだけでなく、大学における研究には教育の側面があります。特に工学系ではこの側面の比重が高いと思われます。すなわち研究を通して教育するわけです。このような研究にはいくつかの段階的ポイントがあります。これらを卒業研究を例にとって、自分自身のやり方も交えながら以下に述べます。

- (1) 研究室紹介・・卒業研究を行うにはどこかの研究室に配属される必要があり、そのために

各研究室でどんな研究が行われているか紹介され、それを参考にして希望研究室を決めるのが通常です。したがってこの段階で学生達はやりたい研究のイメージを持っていると思われませんが、実際にはそうでない学生が多いのです。

- (2) テーマ選定に向けての活動・・卒業研究は4年生からですが、そのテーマ選びは非常に重要なことですので、これに十分な時間をかけることが望まれます。これまで所属していた名城大学情報工学科では3年生の10月に研究室配属を行い、3年生の期間をかけてテーマ選びを行えるようになっていました。近頃では、どんな研究をやりたいか尋ねても明確に自分の興味を示すことができる学生は少数であると言っても過言ではありません。そこで私は学生達と何度も話し合って興味を引き出すようにしています。関連技術分野に興味を持っていない場合には、将来進みたい方向や日常生活の中で何に興味を持っているかを確かめます。そしてそれがわかれば、研究とどのように結び付けていくかを話し合います。学生自身の興味をさらに明確にするために、定期試験が終わったら、話し合いと並行してIEEE Spectrum 1年分の記事の中から好きなものを選ばせて読ませ、その内容をA4一枚に要約して皆に紹介するというのもやりました。興味と同時に英語の読解力と内容を要約する能力を知る意味もあります。
- (3) テーマ選定・・上記の活動ののち、遅くとも4月初めまでに研究テーマを決めるのですが、教師側から強制したりテーマ候補の中から選ばせるということはありません。あくまで学生が自発的に決めるようにします。テーマは学生自身にとって楽しいものであることが大切です。途中で変更することも可とします。卒論では、完成度は重視せず、挑戦的であることを期待します。

このようにして選定された卒論テーマの例（平成 19 年度）を下に示します。これらを見ると、結局のところ私の研究領域内にあり、挑戦的とは言い難いようです。

- ZigBee を応用した災害時通信に関する研究
 - IC タグによる災害時人命救助に関する研究
 - 地上デジタルテレビ信号のダイバシチ受信に関する研究
 - LED を用いたマルチキャリア信号伝送に関する研究
 - 電力線通信と結合した可視光通信に関する研究
 - 海亀生態観測用衛星通信システムにおける誤り制御に関する研究
 - フェージング環境下におけるダイバシチ復号方式の特性評価に関する研究
 - LED 交通信号機による光 F M 通信に関する研究
- (4) 研究の実施・研究の実施に当たっては、時に応じて小目標を設け、柔軟に進めるようにしています。研究の過程で学生が示したアイデアは極力取り入れるようにします。研究を進める中で、毎週 1 回研究室で報告会を行うことにし、各学生は、ひと月に 1 回自分の研究について A4 一枚に要約して皆に報告し、討論することになっています。
- (5) 研究発表・これは研究による教育にとって最も重要ですので、後に述べます。
- (6) 研究の実施・発表の繰り返し・発表したら研究はおしまいではなく、発表時に得られた意見などを参考にしつつ、研究のレベルを向上させます。
- (7) 論文を作成・研究の集大成として、論文に仕上げます。なお論文は、卒論、修論毎にまとめて製本し、卒業式の日に各学生に渡すと共に、数部研究室に残しています。
- (8) 後輩のために参考資料をまとめる。・例えば開発したソフトを利用しやすくして残します。

研究発表について

研究を進めていく過程でその成果を発表することは重要ですが、研究による教育では特に重要で、何度も行いうことが望まれます。特に外部に向けての発表が重要です。発表するということは、口頭で発表すること以外に、予稿作成、口頭発表原稿作成、質疑応答を行わなくてはなりません。

ここで、大学院生を対象として、国際会議で発表する場合を考えます。まず学生が発表する気になったとします。学生は投稿原稿を執筆することになりますが、その第 1 歩として和文で原稿を作ります。これによって主旨と骨格を明確にしておいてから、英文原稿作成に取り掛かります。完成までに数回修正を繰り返すのが通常です。投稿した原稿（第 1 著者は必ず発表学生）が採択されたら、口頭発表原稿の作成に取り掛かります。これも和文から始め、次に英文に移ります。スライドも含め、一応出来上がったら発表練習に入ります。概ね学生にとって英語での発表は初体験ですので、発音が問題となりますが、私は、ゆっくりはっきりしゃべることと、アクセントを重視します。何回も（通常 10 回程度）発表練習を繰り返す中で口頭発表原稿の修正も行います。完成段階では原稿を見なくても発表できるようにすると同時に質問を想定した原稿も用意します。現場での質問は、想定したものと異なっているのが通常ですが、これを用意し、十分に練習をしておくと、自信が生まれ、質問に正しく答えられる可能性が高まります。

研究発表のあとの充実感は何にも代えがたいものです。私は、結果がどうであれ、よくやったとねぎらい、食事に招くことにしています。研究発表、特に国際会議でそれをやり遂げた経験は、学生にとって大きな財産となって残ると思います。

ところで研究発表の場には、以下に示すようないろいろの性格を持つものがあり、それらをうまく使っていくとよいと思われます。

- (1) 研究室・自分の考えをまとめて発表することと討論することに慣れる。

- (2) 学会支部連合大会・外部発表の第1段階と捉える。
- (3) SITA など学会研究会・専門家の質問やコメントから研究進展のヒントが得られる。
- (4) 全国大会・自分の研究を認めてもらう。
- (5) 国際会議・さまざまな貴重な体験を得る。英語力を高める。
- (6) 学会論文誌・査読者を満足させる努力。不屈の精神力。1人前の研究者への入口。
- (7) 卒論、修論発表・それまで行った研究のまとめとそれに対する評価を受ける。

おわりに

研究による教育について私見の一端を述べました。このような教育は、皆さんそれぞれにやっておられることで、何を今更と思われるでしょうが、いくらかでも参考になれば、幸いです。研究による教育は、専門知識だけでなく、技術者として具備すべき基本的な能力、例えば、頑張る力、文章作成能力、発表・説明能力、協調能力、指導能力等を身に付けるのに有効であることと、本学会がこのような教育に大きく貢献していることを強調して、名誉会員挨拶に代えさせていただきます。

2007年 SITA 奨励賞受賞者の言葉

小室 信喜 (千葉大学) 廣友 雅徳 (神戸大学) 矢野 亨 (株式会社 東芝)



小室 信喜 (千葉大学)

情報理論とその応用学会奨励をいただくことは、この上ない名誉であり、大変ありがたく思います。今回受賞の対象となった研究は、符号シフトキーイングを用いる CDMA ALOHA 方式における干渉キャンセラの効果についてです。

ALOHA はワイヤレスパケット通信のアクセス制御プロトコルのベースであり、ALOHA の改善はさまざまなシステムへの応用ができると期待できます。そこで学部時代より、ALOHA の性能向上法に関する研究を行ってまいりました。特に、Code Division Multiple Access (CDMA) ALOHA の性能向上に関する研究を行っております。CDMA ALOHA は耐

衝突性能に優れており、多元接続を可能とする通信プロトコルでございますが、達成する最大スループットは向上いたしません。そこで、最大スループットの向上を目的として、多値変調方式の一つである符号シフトキーイングを用いる CDMA ALOHA の検討を行っております。今回受賞対象となった研究では、非直交符号シフトキーイングを用いる CDMA ALOHA に干渉キャンセラを導入したシステムのスループットの理論式を導出し、干渉キャンセラの効果を検討いたしました。その結果、(a) 符号シフトキーイングには直交系列を用いるという一般的な概念を打破し、非直交系列を用いることにより性能向上を図れること、(b) 干渉キャンセラを導入することによってスループットが 1 を越えること、を示しました。論文発表後には、貴重なご意見や好意的なご感想を賜り、また、このような名誉ある賞を受賞することができ、非常にうれしく思います。

学会発表をすることで、さまざまな経験をすることができます。たくさんの研究者の方との交流を深めることもできます。特に、SITA は著名な先生方とじかに交流できるチャンスのある学会であり、非常に有意義な学会です。また、SITA は温泉で有名な

場所で開催されることが多いため、温泉、お酒、食事を楽しみながら学会に参加することができ、著名な先生方の貴重なご意見・お考えを拝聴することができます。「じかに交流できる」というのがSITAの醍醐味の一つだと思います。SITA2008の懇親会では、名誉会員になられた小川明先生とお話することができ、大変貴重な・ためになるお話をうかがうことができ、非常に有意義でした。今後も学会発表を積極的に行い、討論を通して自分の研究を昇華していきたいと思ひます。

学部時代から研究の指導をしてくださった茨城大学の羽瀧裕真先生をはじめ、鎌田賢先生、黒澤馨先生、羽瀧研究室の現役およびOB/OGの皆様、東京工科大学の坪井利憲先生、SITA等を通じてお世話になっている先生方、SITA奨励賞に推薦して下さった方々に深く感謝いたします。今回の奨励賞受賞を励みとし、研究・学会活動に精いっぱい努める所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひいたします。



廣友 雅徳 (神戸大学)

この度は、名誉あるSITA奨励賞を頂戴し、大変嬉しく感じております。私達の論文を評価し推薦して下さった方々、奨励賞に選んで下さった選考委員の皆様にお礼申し上げます。また、共著者であり、日頃からご教授頂いています森井昌克先生、毛利公美先生に深く感謝しております。

今回、受賞対象となりました論文「確率的アルゴリズムに基づくLDPC符号の重み分布導出法の能力について」は、低密度パリティ検査(Low-Density Parity-Check: LDPC)符号の重み分布計算法に関

するものです。LDPC符号は疎なパリティ検査行列で定義される線形符号であり、反復復号法によって復号することで優れた性能を示すことから、近年盛んに研究がなされています。LDPC符号の復号には一般に反復復号法が用いられますが、その符号自身の誤り訂正能力を評価するという意味では最尤復号特性の評価は重要であり、重み分布を求めることで符号の能力を明確に知ることができます。しかし、重み分布を求めるための計算量は符号長、情報記号数が大きくなるに従って増加し、反復復号法によって十分な性能を発揮するようなLDPC符号の重み分布を求めることは困難になります。

私達は、計算量が非常に大きくなるLDPC符号の重み分布導出問題に対して、確率的手法というアプローチをとり、現実的な計算時間で重み分布を求める方法について研究を行ってきました。この方法は、従来までに線形符号の最小距離評価として提案されていた確率的アルゴリズムを拡張した重み分布推定手法です。確率的アルゴリズムによって低重みの符号語を高確率で発生させ、性能評価で最も重要となる最小重み付近の符号語数(重み分布の低重み部分)を推定する方法となっています。

この研究に取り掛かった当初は、LDPC符号の重み分布を求める際の計算量の膨大さと、パリティ検査行列が疎であるという定義のみでその構造に代数的特徴をもたないことから、どのように重み分布計算を効率化したら良いものかと悩みましたが、森井先生、毛利先生のご指導のお陰で、LDPC符号の重み分布を求める方法を確立することができました。そして、この方法を2004年の電子情報通信学会情報理論研究会で発表し、SITA2004では確率的アルゴリズムにおける符号語発生確率の解析、SITA2006では確率的アルゴリズムの修正法について発表致しました。このSITAでの発表を通して諸先生方から助言を頂くことができ、研究を進められたことは非常にありがたく感じております。SITA2006発表後は、確率的手法のメリットを活かし、推定した重み分布の信頼性を明らかにするために、確率的に求めた重み分布の誤り確率の評価方法(推定誤差の見積もり方)を確立することに取り組みました。そして、

符号長が大きい LDPC 符号に対しても現実的な計算時間で誤り確率を十分小さくして重み分布を推定できることを示すことができ、その成果を SITA2007 で発表させて頂きました。このような内容は情報理論的な性質や特徴というよりも、現実的な計算方法を示したという内容になっており、今回の賞に見合うものかと疑問に感じておりますが、今後の研究者としての激励と受け止め、研究活動に励みたいと考えております。

最後に、このような素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございます。今回の受賞に恥かしくないよう、より一層研究活動に励み、情報理論とその応用分野に少しでも貢献できるよう尽力したいと存じますので、今後とも諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



矢野 亨 (株式会社 東芝)

このたび情報理論とその応用学会奨励賞をいただき、大変光栄に思います。論文の推薦ならびに審査をしてくださいました先生方に厚く御礼申し上げます。そして、論文の共著者である京都大学の田中利幸教授とアストン大学のデビッド・サード教授に深く感謝いたします。また、研究を進める上で手厚くご支援くださいました慶應義塾大学の本多敏教授に深く感謝いたします。

賞の対象となりました論文は、符号化 CDMA システムにおける事後平均にもとづくマルチユーザ検出方式の性能解析を行ったものです。

Tanaka が最適な CDMA マルチユーザ検出方式の性能を統計力学の解析手法であるレプリカ法によって解析したのに続いて、Guo と Verdú は事後平均に

もとづくマルチユーザ検出方式(この方式には、最適な検出方式や線形検出方式が含まれます)の性能をレプリカ法によって解析し、事後平均にもとづくマルチユーザ検出方式のスペクトル効率の解析的評価を与えました。さらに彼らは、ランダム拡散の仮定のもとで、事後平均にもとづくマルチユーザ検出方式を利用する CDMA システムは、ユーザそれぞれが単独にガウス通信路へシンボルを送信するシステムと大システム極限において統計的に等価であることを示しました。彼らは、この性質をデカップリング原理と名付けております。

Guo と Verdú の研究は誤り訂正符号化を明示的に考慮していないシステムに対するものであり、符号化を明示的に考慮したシステムのスペクトル効率の解析的評価が得られるかどうかは明らかではなく、また符号化システムにおけるデカップリング原理の成立も明らかではありませんでした。本論文では、任意のブロック符号化方式を想定したシステムにおいて、事後平均にもとづくマルチユーザ検出方式のスペクトル効率の解析的評価を与えました。さらに、当該システムにおいてもデカップリング原理が成立することを示しました。事後平均にもとづくマルチユーザ検出方式を利用する符号化 CDMA システムは、ランダム拡散の仮定と大システム極限において、符号シンボル位置によってノイズレベルが一般には異なるガウス通信路を各ユーザが単独に利用するシステムと統計的に等価であることが分かりました。デカップリング原理から得られるガウス通信路の分散が一般には符号シンボル位置に依存することは、符号化を明示的に考慮することによって初めて分かる特徴です。また、得られた一般的な結果にもとづいて、具体的な符号として LDPC 符号を利用する CDMA システムの解析を行いました。レギュラー LDPC 符号を用いた場合、一般の符号化 CDMA システムの結果とは対照的に、デカップリング原理から得られるガウス通信路ノイズの分散は符号シンボル位置によらず等しいことが分かりました。これは、レギュラー LDPC 符号アンサンブルにおける符号シンボル位置の統計的一様性によって生じるものです。さて、私は現在、東芝で情報理論とは少し離れた

研究開発に従事しておりますが、学生時代の研究の積み重ねがあるからこそ今の仕事に取り組めることを強く感じております。いただきました賞を励みと

して今後も頑張っていきたいと思っております。

ISITA2008 開催報告

横尾英俊 (群馬大学)



横尾英俊 (群馬大学)

ISITA2008 は、2008 年 12 月 7 日 (日) から 10 日 (水) までの 4 日間にわたり、多数の会員の皆様の参加とご協力を得て、成功裡に開催することができました。実行委員会、TPC 委員会を代表しまして、まずは皆様に厚く御礼申し上げます。本稿では、順序が逆になりますが、開催の概要と開催までの過程を報告いたします。

開催概要

ISITA2008 は、上記の期間、オークランド (ニュージーランド、以下 NZ と略記) のホテル The Lang-

ham において開催されました (図 1)。1990 年にホノルルで第 1 回の ISITA が開催されて以来、ちょうど 10 回目となる今回のシンポジウムでは、10 回目としての記念行事は特に企画しませんでした。10 回目にふさわしい多数の投稿と参加を得ました。表 1 に開催状況の基本データを示します。投稿論文数、パラレルセッション数とも、過去最大です。

表 1. ISITA2008 基本データ

ISITA2008	
参加者数	384
参加国数	32
投稿論文数	380
採択論文数	292
パラレルセッション数	7
延べセッション数	69
プレナリー講演数	3

開会に先立ち、12 月 6 日には “Let’s meet before the conference” と称するツアーが実施されました。



図 1. ISITA2008 . ホテル玄関と広報ディスプレイ



図 2 プレナリー講演の三氏と山本学会会長

オークランドハーバーからのフェリーで、一組はランギトト島に、一組はティリティリマタンギ島に日帰りツアーに出かけました。参加者は少数でしたが、ニュージーランド自然の特徴的な一面を味わうことができました。そして、シンポジウムそのものは、12月7日の歓迎式典で幕をあげました。

歓迎式典は、ほら貝の音に導かれたニュージーランド先住の人々（マオリ）の Powhiri（ポフィリ、ポウヒリ）という儀式です。Powhiri では、マオリの人々がシンポジウム参加者に敵意がなく友好的であることを確認したのに対し、General Chair の一人の Ulrich Speidel がマオリ語で答えました。後日その意味を聞いたところ、自分のルーツを説明することで、自分が誰であるかを説明し、同時に、マオリの人々の対応への感謝の意を述べていたとのこと。Powhiri やバンケットのショーでのマオリの人々の力のこもったダンスを見て、ラグビー、ニュージーランド代表のオールブラックスが試合前に行うハカを思い出された方もいたかも知れません。

12月8日からの一般セッションでは、情報理論、符号理論をはじめとする、通信、信号処理、ネットワーク、セキュリティといった分野で質の高い研究成果の報告が多数なされました。セッション数が特に多かったのは、Signal Processing (6 セッション)、LDPC Codes (5)、MIMO (4)、Multi-Terminal Information Theory (3)、Spread Spectrum (3)、Communication Systems (3) などとなっています。

12月9日の午後には、Networks—Practice and Theory と題した共通テーマのもと、3 件のプレ

ナリー講演が行われました。講演者と講演題目は次のとおりです。(1) Brian E. Carpenter (University of Auckland), *The Internet: where did it come from, why did it succeed?* (2) Raymond W. Yeung (Chinese University of Hong Kong), *Network Coding for Error Correction and Security*, (3) Te Sun Han (早稲田大学), *Network Coding with Multicast of Correlated Multi-Source to Multi-Sink*.

三氏の講演は、同じネットワークとはいえ、ネットワーク符号化からインターネットまで幅の広い内容から成るものでしたが、対象となっている“情報”と“モノ”がいかに異なるかという点で認識が一致しており、印象的でした。特別講演をお引き受けいただいた三氏には、改めて感謝するしだいです。

バンケット (12月9日, 19:30~)

司会：Ulrich Speidel

実行委員長挨拶	横尾
乾杯	Ulrich Speidel
SITA 会長挨拶	山本博資
Committee 紹介	日本側：横尾
	NZ 側：Ulrich Speidel
IEEE Award 紹介	森田啓義
学生スタッフ紹介	
と記念品贈呈	Ulrich Speidel
マオリショー	
ISITA2010 紹介	河野隆二

図 3. バンケットプログラム



図 4. (左) バンケットでの現地学生スタッフへの記念品贈呈, (中央) マオリショー, (右) 一般セッション

同じ 12 月 9 日の晩には, バンケットが開催されました。図 3 にバンケットのプログラムを示します。バンケットプログラムにある IEEE Award 紹介では, IEEE IT Society の Japan Chapter の企画である表彰事業の紹介と受賞者の発表がありました。これは, 今回の ISITA にあわせ, 日本国内在住の若手の IEEE 会員を対象にして IEEE IT Society Japan Chapter Travel Support Award for Young Researchers という表彰を実施したものです。ISITA2008 に受理された論文を審査して, 4 名に表彰状と旅費の助成がなされました。従来から学会が実施している旅費助成も継続して実施し, 日本から 14 名, 海外からの参加者 6 名に対して旅費助成を行いました。

バンケットはこの後, マオリショーと次回の ISITA2010 の紹介が続き, 盛会のうちに閉会となりました。シンポジウムそのものは, 翌日の一般講演をもって終了しましたが, 帰路の航空便の関係でオークランド滞在を 1 日延長された方も多かったようです。

開催まで

私が ISITA2008 についてのお話を初めていただいたのは, 2006 年の 2 月の中旬でした。当時の学会会長の坂庭好一先生から, ISITA2008 をニュージーランドで開催したいという希望があるので, NZ 側の取りまとめ役を探してくれないかというものでした。私の想像では, 2005 年に NZ のロトルアで開催された ITW2005 に参加した学会関係者から, もう一度 NZ に行ってみたいという声が上がったのではない

かと思います。そこで, 以前在外研究員として NZ に滞在した経験があり, また ITW2005 にも参加していた私に白羽の矢が立ったのでしょうか。うかつにも, NZ 側の取りまとめ役探しだけが任務だと勘違いしたことが, その後今日に至るまでの 3 年間の“想定外の連続”の始まりでした。

まず, ITW2005 を実質的に運営していた Ulrich Speidel (オークランド大学) に NZ 側の取りまとめ役を依頼しました。すぐに快諾いただいたまではよかったのですが, 何でも一人でこなしてしまう彼のエネルギーは想定以上のものでした。最初の会場探しから始めて, 最後のセッション間の軽食のメニューまで, すべてが彼の手による選定・作成・運営であったといっても過言ではありません。NZ には大きな旅行会社や PCO (Professional Conference Organizer) がないということで, そういった外部機関に委託するかわりに彼が長年作り上げてき会議運営サイトを中心として, すべて手作りのシンポジウムになりました。

表 2 に実行委員会メンバーを示します。実行委員会の皆さんには, それぞれの役職を快くお引き受けただけでなく, このような手作りのシンポジウムに全面的に協力いただきました。今回, 初めての試みとして, 採択論文を IEEE Xplore 電子図書館に掲載する準備が進められています。Xplore 掲載実現にこぎつけるにあたっては, General Secretary の鎌部先生, 出版担当の渋谷先生, 長谷川先生に特にご尽力いただいています。世界中から過去最大数の論文投稿があったのは, 一つには NZ の魅力, そしてもう一つには Xplore 掲載ということが大きな

表 2 ISITA2008 実行委員会構成

General Chairs	Ulrich Speidel (オークランド大) 横尾英俊 (群馬大)
General Secretary	鎌部 浩 (岐阜大)
Finance Chairs	中川健治 (長岡技科大) 村松 純 (NTT)
Publications	渋谷智治 (上智大) 長谷川浩 (名古屋大)
Registration Chair	古賀弘樹 (筑波大)
Conference Manager	Penny Barry
Local Arrangements	Emilia Mendes (オークランド大) Sathiamoorthy Manoharan (オークランド大)
Technical Program	
Committee Chair	山本博資 (東京大)
Vice Chair	森田啓義 (電通大)
Secretary	有村光晴 (湘南工科大)
International Advisory	
Committee Chair	小林欣吾 (電通大)

要因になっていたと考えられます。投稿論文数が過去最大になったということで、論文を査読して採否を決定する作業も、そして採択論文間の著者の重なり
に注意しながらプログラムを作成する作業も大変な
手間となりました。委員長の山本先生をはじめとする
Technical Program Committee メンバーの皆様
に心より感謝申し上げます。委員会としては、このほ
か、小林先生に International Advisory Committee
メンバーとして 38 名を選定いただきました。

その後、2008 年 5 月 7 日の論文概要締切、7 月 31
日の採否通知、9 月 7 日の最終原稿受付、著者登録締
切などを経て、12 月のシンポジウム本番を迎えまし

た。その間、シンポジウムまでの為替レートの急激
な変化に象徴されるように、想定以上、想定外のこ
とはいくつもありましたが、シンポジウムそのもの
は参加者の皆さんに大いに楽しんでいただけたよう
に思います。機会がありましたら、ぜひ次は、個人
旅行でオークランド以外にも足をのばしていただき、
NZ の別の側面を堪能していただければと思います。

なお、次回の ISITA2010 は台湾の Taichung (台
中) で 2010 年 10 月 17 日から 20 日まで、ISSSTA
と同時開催の予定です。今回同様、多くの会員の皆
様の参加をお願いします。

IBIS2008 開催報告

杉山 将 (東京工業大学) 田中和之 (東北大学)



杉山 将 (東京工業大学)



田中和之 (東北大学)

2008年10月29日-31日の日程で仙台国際センターにおいて第11回情報論的学習理論ワークショップ (IBIS2008) が電子情報通信学会情報論的学習理論時限研究専門委員会ならびに文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「情報統計力学の深化と展開」によって共催されました。開催地が首都圏以外ということで参加者数がどうなるかが心配でしたが、150名を超える研究者、大学院生の参加があり、大盛況のうちに終了いたしました。

今回のプログラム委員会は30歳代の若手研究者の数を大幅に増やし、次の時代にむけての情報論的学習理論を大きなテーマとして企画されました。

オーガナイズドセッションは複雑ネットワークと機械学習、学習と制御：ロボットへの応用、ノンパラメトリックベイズ、自然言語処理、最適化と機械学習、密度比推定の手法と応用という6つのトピックスで構成されました。その構成の概略は以下の通りです (敬称略)。

「複雑ネットワークと機械学習」

講演者： 増田直紀 (東大), 加藤幹生 (mixi),
山田武士 (NTT)

「学習と制御：ロボットへの応用」

講演者： 藤本健治 (名大), 内部英治 (沖縄先端大),
森本淳 (JST-ICORP/ATR),
矢入健久 (東大), 稲邑哲也 (NII)

「ノンパラメトリックベイズ」

講演者： 上田修功 (NTT), 持橋大地 (NTT),
栗原賢一 (Google)

「自然言語処理」

講演者： 松本裕治 (奈良先端大)

「最適化と機械学習」

講演者： 脇隼人 (電通大), 北原知就 (東工大),
岡本吉央 (東工大)

「密度比推定の手法と応用」

講演者： 杉山将 (東工大)

オーラルセッションはすべてオーガナイズドセッションのみにしぼり、一般講演はすべてポスターセッションとしました。ポスターセッションでは60件をこえる発表があり、時間を長めに設定し、十分な議論を行っていただきました。このポスターセッションではどの発表の前でもたくさんの人だけができ、質問をするためにしばらく待たされる発表もあるほどの盛況ぶりでした。

なお、今回のワークショップから優秀発表賞が創設され、以下の2件のポスター発表が表彰されました (敬称略)。

情報幾何を用いた Expectation Propagation の推定誤差の評価とその性質の解析

講演者： 松井秀往 (京大), 田中利幸 (京大)

階層木 Logistic 回帰モデルによる多クラス分類
講演者： 岡野原大輔 (東大), 辻井潤一 (東大)

今回は九大の竹内純一先生が実行委員長をつとめられ、2010年の秋に開催される予定です。また、多くの研究者が参加されることを期待しております。

博士論文要旨募集

6月末に発行予定のニュースレター No.71 では、本学会に関係する分野で執筆された博士論文の紹介を予定しています。学位を最近取得された方からの博士論文要旨の投稿をお待ちしていますので、以下の要領により奮って投稿して下さい。

投稿原稿： 大学に提出する要旨の書き方が基本です。昨年ニュースレター No.67 の博士論文特集号を参考にして下さい。

<http://www.sita.gr.jp/jpn/news/index.html>

からダウンロードできます。

原稿形式： できるだけ L^AT_EX のソースファイルが望ましいですが、その他の形式でも受け付けます。

投稿締切： 2009年5月29日(金)

投稿先： sita-hensyuu@sita.gr.jp

ご不明な点は巻末の編集理事・幹事にお尋ね下さい。

ニュースレター原稿募集

ニュースレター編集担当では、会員の皆様からの原稿をお待ちしております。研究会やワークショップなどの call for papers や国際会議などの参加報告、会員の声など、気軽に投稿して下さい。

今年は、あと3回のニュースレターの発行を予定しております。原稿の締切は、5, 8, 11月末です

が、随時投稿を受け付けており、原稿を頂いた時点での最近号に掲載する予定です。原稿は、できるだけ L^AT_EX のソースファイルが望ましいですが、その他の形式でも受け付けます。写真などの掲載も歓迎します。詳細は、巻末の編集理事・幹事にお尋ね下さい。

編集後記

年度が替わり、SITA ニュースレターの編集担当も新しくなりました。ニュースレター第70号から73号までを、この体制で皆様にお送りする予定です。

今回原稿をお寄せいただいた皆様のご協力により、第70号を無事発行することができました。お忙しい

中ご執筆頂きありがとうございます。この場をお借りして、お礼申し上げます。

残りの3回を、少しでも SITA 会員の皆様楽しんでいただける内容にしていければと思います。

(竹内, 實松)

編集担当者

竹内 純一 (編集理事)

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744

九州大学大学院システム情報科学研究院情報学部門

Tel. 092-802-3621

Fax. 092-802-3626

E-mail: tak@csce.kyushu-u.ac.jp

桑門 秀典 (編集理事)

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町 1-1

神戸大学大学院工学研究科電気電子工学専攻

Tel. 078-803-6091

Fax. 078-803-6106

E-mail: kuwakado@kobe-u.ac.jp

實松 豊 (編集幹事)

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744

九州大学大学院システム情報科学研究院情報学部門

Tel. 092-802-3624

Fax. 092-802-3624

E-mail: jitumatu@csce.kyushu-u.ac.jp

岩本 貢 (編集幹事)

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1

電気通信大学大学院情報システム学研究科

Tel. 042-443-5629

Fax. 042-443-5628

E-mail: mitsugu@is.uec.ac.jp

情報理論とその応用学会事務局

〒619-0237 京都府相楽郡精華町光台 2-4

NTT コミュニケーション科学基礎研究所 村松 純 気付

E-mail: sita-office@sita.gr.jp

URL: <http://www.sita.gr.jp/>